中国文化読本

中国文化读本（日文版）

葉　朗　朱良志（著）

外语教学与研究出版社

中国文化読本

中国文化读本（日文版）

著/著　葉　朗　朱良志

译/訳　古市雅子（日）

日文审订/监訳　竹内実（日）

金　勲

外语教学与研究出版社

北京

Copyright © 2011 by Foreign Language Teaching and Research Press

ALL RIGHTS RESERVED
本書の版権は出版社に帰属します。権利者の許可なしに複製、あるいは使用(コピー、録画、録音、インターネットあるいはアーカイブや検索システムを含む)することはできません。

图书在版编目(CIP)数据

中国文化读本：日文版：日文/叶朗，朱良志著；(日)古市雅子译. — 北京：外语教学与研究出版社，2011.4
ISBN 978-7-5135-0773-8

Ⅰ. ①中… Ⅱ. ①叶… ②朱… ③古… Ⅲ. ①文化—中国—日文 Ⅳ. ①G12

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 062601 号

出 版 人: 于春迟
责任编辑: 丁 宁 刘虹艳
装帧设计: 蔡 曼
出版发行: 外语教学与研究出版社
社 址: 北京市西三环北路 19 号(100089)
网 址: http://www.fltrp.com
印 刷: 北京雅昌彩色印刷有限公司
开 本: 787×1092 1/16
印 张: 25.5
版 次: 2011 年 6 月第 1 版 2011 年 6 月第 1 次印刷
书 号: ISBN 978-7-5135-0773-8
014900

* * *

购书咨询: (010)88819929 电子邮箱: club@fltrp.com
如有印刷、装订质量问题，请与出版社联系
联系电话: (010)61207896 电子邮箱: zhijian@fltrp.com
制售盗版必究 举报查实奖励
版权保护办公室举报电话: (010)88817519
物料号: 207730001

序

二十一世紀に入って国際社会は中国に注目し、より深く、広く、中国文化を理解したいというひとが増えた。北京オリンピックは、中国文化を理解する絶好の機会となったが、この時期に、北京大学の葉朗教授、朱良志教授による本書、『中国文化読本』が出版された。

葉朗教授は、われわれが青少年の素質向上のための情操教育の理論と実践を模索するなかで知り合った古い友人で、北京大学哲学系、宗教学系、芸術学院の学部長を兼任する、影響力のある哲学家、美学家である。朱良志教授も、哲学、芸術を長く研究し、絵画、書法、中国庭園などの伝統芸術と禅宗哲学に造詣が深い。

本書は、中国文化の特色を具体的に紹介し、そこに内在する核心的価値を伝えようとするものである。それを通して、中国人の生活に対する態度や美的情緒の普遍的価値を発掘しようとした力作である。

この本は、紫禁城、天壇、兵馬俑、民家などの建築物、書法、絵画、中国庭園、京劇、陶磁器などの芸術品について生き生きと書かれている。これらはみな内在する生きた精神をもち、ひとびとの生活の情緒を凝縮している。

この本が注目した重点は、庶民の精神世界である。『清明上河図』、

北京っこ、上海っこといった土着を誇るひとびとを紹介し、これらのひとが、調和があり、安定した、平和な足りるを知る心をもつことをのべている。長い歴史を経た中華文明が今もなお衰えないことと関係しているのかもしれない。

この本は、衣食住、琴棋書画など、生活の情緒を反映し、小をもって大を知るように書かれている。囲碁ひとつとっても、「同好の士」と心を通わせあい、ともに立派な局面、「好局」をつくることで、共に生き、心の快楽を得る、という。

この本は絢爛たる古代と現代中国の文化に生きるひとびとの広く、平和で開放的な心、純粋で優雅な内在世界を示している。世界の多くのひとびとが、この本を手にとってくださることを心から願っている。

李炎清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

1 知恵と信仰

一、孔子の「天人之学」 2

「天」――生命創造の源
「仁」――父母への愛から天地万物への愛へ
「礼」――社会の安定と調和を保つ
より有意義で価値のある人生を追い求める

二、無為自然の老子哲学 13

反ることは、道の動くなり
無為にしてしかも為さざるは無し
不争の哲学
「嬰児」への回帰

三、変易を強調する『周易』思想 25

『周易』の基礎、陰陽
『周易』は「変」の道理を説く
『周易』の象

四、『孫子の兵法』――百代の兵法の祖 35

知慮に富んだ戦略思想
対立要素を利用して「勢」をつくる
「慎戦」の教え
軍事を超越した孫子の知恵

五、禅──「妙悟」の教え　48
如し人　水を飲まば、冷暖　自ずから知る
美はどこにあるのか
生命力あふれる世界の出現

六、天壇──天への畏敬と感謝　57
天壇の神々
白雲の青空に浮かぶ天壇
自然への畏敬の念
ひとびとの無病息災を祈念
ひとと天の交わり

創造と交流

七、詩的な記号──漢字　68
記号のなかに凝縮された思想と歴史
感情をもつ記号
優雅な形

八、文明の発展に影響を与えた四大発明　77
羅針盤と航海術
製紙術と文明の伝播
知識を広めた印刷技術
火薬──錬丹術がもたらした発明

九、文明流通の大動脈──シルクロード　87
流行となったシルク
開拓者 張騫
「西方」への開放
亀茲石窟

十、全体のバランスを求める中医学　99
病を未然に防ぐ
一時しのぎであってはならない
つぼと経絡

十一、唐代の開放的な気風 107
芸術の開放
宗教の開放
玄奘と義浄──異文化を学ぶ意欲
国際的な大都会となった長安

十二、鄭和の大航海──人類航海史上の壮挙 119
先進的な航海文明
海洋にむかう開放的気風
共に太平を享受する

十三、平和を祈る万里の長城 130
平和への願望
隔離と融合
長城の「精神」
長城の美

十四、紫禁城の輝きと威厳 138
一筋の「龍脈」
紫禁城の色彩
皇帝の絶対権威の確立

芸術と美

十五、音楽──「以楽治国」と「以琴養心」 148
以楽治国──楽をもって国を治む
以琴養心──琴をもって心を養う

十六、青銅器に凝縮された精神 156
神秘の礼器──大盂鼎
大空へ飛びたつ精神──蓮鶴方壺
速さへの憧憬──馬踏飛燕
蜀国の祭器──三星堆の青銅器

十七、声なき軍陣──始皇帝の兵馬俑 166
兵馬俑の発見

秦陵の地下宮殿
天下を駆りたてる帝王の気勢
生命力にあふれた彩色彫刻

十八、仏像──永劫の微笑み　174
莫高窟の観音菩薩の美
麦積山仏像の淡い微笑み
龍門の光明の神
青州仏像の悟りの微笑

十九、舞い踊る線──書法　182
舞のリズム
書法は兵法の如し
風流で洒脱な『蘭亭集序』
沈着で重厚な顔体

二十、水墨画の趣き　192
色のない世界
外観の相似を超えた造型の原則
宋元の山水の境地
明清以降の新たな創造

二一、唐詩──はるかなる絶唱　205
杜甫の詩の沈鬱な美
李白の詩の飄逸とした美
王維の詩の空霊の美

二二、明清小説──芸術に触れ人生を思う　217
『三国演義』──三国の歴史絵巻
『水滸伝』──英雄像の創作
『西遊記』──孫悟空のヒロイズム
『紅楼夢』──「有情之天下」が崩壊する悲劇

二三、中国文化の「名刺」──磁器　228
自然が織りなす美
青花の如き清浄
内に秘めた美
造型と絵画的情緒

二四、雨に煙る江南の庭園 238
曲がりくねった道がいざなう幽玄の世界
庭園の風情と趣き
石の意義
空間の美
二五、京劇──「役柄」に見る芸術性 248
京劇隈取のあでやかな美
唱、念、做、打
「虚構」の妙
観戯は役者を観る
京劇の大家──梅蘭芳
二六、華麗なる民間芸術 258
景泰藍──宝石のようにきらめく工芸品
年画──正月の吉兆を演出
切り絵──ハサミが切りだす世界
刺繍──十指が生みだす春風
影絵──光と影の芸術

民俗と風情

二七、『清明上河図』の都市の風情 268
汴河両岸の風景絵巻
北宋の都市文化
普通のひとの本当の美
二八、オールド北京の風情と味わい 281
オールド北京の食
胡同と物売りの声
喧騒の天橋
オールド北京の縁日
北京ッ兒の休日生活
二九、オールド上海の現代的な雰囲気 295
もっとも開放的な都市

時代の先端を追い求めて
石庫門と横町の風情

三十、中国服のオリエント風 309

優美な中国服
旗袍のあでやかさ
自然本来のろうけつ染め
きらきらと輝く芝居の衣装

三一、中国の美食 319

食の地方風味
名前に隠された物語
食卓のあたたかい雰囲気
コックのずばぬけた技術

三二、茶の香りにあふれる人生 329

茶の効用
茶を味わう方法
茶と民俗

三三、酒に深みあり 341

酒以成礼
酒はひとの心に溶けこむ
人生の慰め
酔うと筆は虎のごとく猛々しい
酒と民俗

三四、さまざまな民家 354

北京四合院
消えゆく麗江の古都
白壁と黒瓦の安徽省の民家
静かな水郷——西塘

三五、功夫と蹴鞠 369

天下の功夫　少林より出づ
円を描いて流れるような太極拳
功夫は精神から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蹴鞠　屡過ぐ飛鳥の上

三六、囲碁──知的遊戯　382

爛柯山の囲碁
一手に含まれる知恵
平和の遊戯
手で会話する

中国史年表　391

観光名所索引　393

知恵と信仰

ひとと天の関係、これは宇宙と人生の根本的な哲学の問題である。この哲学の創始者のひとりが孔子で、古典の『老子』、『周易』などもこの問題をテーマにしている。

孔子は天を、いのちを創造する自然界だとみなした。天は神聖なもので、ひとは天を畏敬し、その恩恵に感謝するべきである。天への畏敬、天の恩恵への感謝は、中国の文化に一貫している。北京の天壇（てんだん）の建築もこのような思想のあらわれである。

孔子の思想の核心は「仁」で、「仁」の本質は愛、生命を尊重することだ。孔子に影響され、ひとびとはいのちにたいし強烈な意識をもった。ひとは大きな生命世界に属し、天地万物と一体である、それゆえ、ひとは「親を親（しん）しむ（した）」〔したしい肉親にしたしむ〕*に始まって、ひとにたいする愛を天地万物への愛にまでひろげるべきだと考えた。

孔子はまた、教育を受けた者は自らの精神世界の向上をめざし、有意義で価値のある生きかたを追求すべきだといい、人生の境地を重んじる学説を確立した。

孔子、老子、『周易』などに見る「天人の学」（天とひとを一体と見る学説）は、古代中国における哲人の知恵の結晶である。

*〔〕は訳者注。

一、孔子の「天人之学」

孔子、名は丘（きゅう）、字（あざな）は仲尼（ちゅうじ）。魯国の陬邑（すうゆう）（山東省曲阜（きょくふ））の出身で、春秋時代末期の思想家、教育者、儒家学派の創始者である。彼の言説と生涯は、その弟子、あるいは孫弟子が編纂した『論語』に記録されている。

『論語』は中国古代の聖なる書物である。孔子以後、二千数百年たったが、これの影響を受けなかった思想家、文学者、政治家はひとりとしていない。**『論語』を知らなければ、二千年以上にわたる伝統文化、古代のひとびとの内在的な心境を理解することはできない。**

「天」と「ひと」に関する孔子の学説にみちびかれて、人類の普遍的価値に踏みこんだひとは多い。

アメリカの研究者、ハーバート・フィンガレットがいうように、「人類は兄弟という感情と公共の美」が孔子の『論語』に見出せる。これこそが二十一世紀の今日、孔子の学説が国際社会で重視される所以（ゆえん）である。

「天」——生命創造の源

孔子以前の殷、周の時代には、天命論が流行し、「天」を、意志をもつ人格神と見なした。孔子の有名な言葉のひとつに、**「天　何をか言わんや。四時行われ、百物生ず。天　何をか言わんや」**というのがある。「天は言葉を話さない。四季の運行と万物の生長をもってその言葉とする」という意味である。「天」とはすなわち自然界である。自然界とはいのちが存在しない、ひとと切りはなされたものではなく、大きな生命世界であり、生命を創造する自然な過程そのものである。ひとのいのちはこの生命世界の一部で、ひとと自然はひとつの総体である。

孔子は「天」を生命を創造するものと説明したが、これは新しい思想だった。孔子は、「天」の言葉は生命創造の自然な過程だと考えた。「天」の根本的な意義は「生」で、これがすなわち「天道」である。後出の『易伝』では、「生生之を易と謂う」〔生あるものを産むことを易という〕といった。『易伝』は孔子の思想をくわしくのべている。

「天」は生命創造の自然な過程である。それはすべての生命の源泉、すべての価値の源泉である。これを「天徳」という。『易伝』には「天地の大徳を生と曰う」〔天地の大いなる徳を生という〕という。これも孔子の思想をのべたものである。

冊告卣　商・後期

生命創造の自然な過程である「天」には、目的、すなわち万物の生長、養育、生命の保護、充実が内包されている。「天」はひとびとを降誕させた。ひとびとにはこの目的を実現する責任がある。これが神聖な使命、すなわち「天命」である。ここからひとの生きる意義が生まれ、ひとの人生に使命ができた。

孔子のいう「天」には神聖性があるが、この神聖性は、生命創造の源泉としての「天」とつながっている。「天」に対しては畏敬の心をもつよう、孔子はひとびとに求めた。孔子は、君子は「天命を畏れる」べきだといったが、このような畏敬も生命創造の源泉である「天」とつながっている。

君子は「天」の声に耳を傾け、「天」の声を実践すべきである。だからいのちを大切にし、まっとうしなければならない。

古代のひとびとの観念では、「天」は最高の存在で、神聖なものだった。「天」の神秘はひとに窮められない。しかし「天」は、キリスト教の神のような、自然を超越した、意志をもった人格神ではない。絶え間なくつづく自然界、つまり生命世界である。「天」は生を「道」とする。生んでまた生み、創造し、さらに創造する。たえまなく、それはつづく。「天」は生を「徳」とし、生命の創造をすべての価値の源泉とする。

「天」はまた生を「いのち」、あるいは「こころ」とする。万物を生長させ、養育することを神聖な目的とするのである。ひとは万物においてもっとも知恵をもつ。「天」の心を「こころ」として、生命を慈しまなければいけない。反対に、「天命を知らず畏れず」、生命を残虐に殺害したりすれば、天の懲罰を受ける。

孔子はいう。「罪を天に獲れば、祷る所なし」天を怒らせたら、祈ってもムダである。**これがすなわち古代のひとびとの「天」にたいする畏敬と信奉である。**

こうした「天」への畏敬と信仰は、古代のひとびとの宗教思想をあらわしている。

生態文明を重視する二十一世紀の今日、「天命を畏れよ」という孔子の言葉は新しい価値感を示している。人類は自然界の声に耳を傾け、畏敬の心をもって自然界というこの生命世界を慈しみ、保護しなければならない。これは神聖な使命、そしてひとのいのちの価値の所以である。

「仁」――父母への愛から天地万物への愛へ

ひとについての孔子の学説には、ふたつの核心的概念がある。ひとつは「仁」、もうひとつは「礼」である。弟子の樊遅が「仁」とは何かと問うと、孔子は「ひとを愛することだ」と答えた。これは孔子の「仁」についてのもっとも重要な説明である。

「ひとを愛すること」の愛とは普遍的な愛である。孔子はひとへの愛を普遍的な原則とし、肉親を愛することから始めなければならないといった。親を愛さない者は普く天下を愛することなどできない。孔子は「孝悌」〔父母に孝行し、目上の家族にしたがうこと〕が「仁の根本」だといった。『中庸』では孔子の「仁は人なり。親を親しむを大なりと為す」という言葉を引用している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com